

にがい経験をした色

菅田 忠志

色と音とはよく似ている。さわやかな色があればさわやかな音がある。けばけばしい色にはやはりけばけばしい音がある。つりあいのとれた色調に対して、音の方にはこちよいハーモニーがある。これも波長に関係があるようだ。

好きや嫌いな色や音というものは、人それぞれ好みの問題であるが、さて、自分の好みの色についてはどうだろう。

衣服や靴など、身につけるものを新調するときなどに、まれに考えることがあるが、普段はあまり考えたことがない。だから女房には、「着たきりすずめ」などとよく冷やかされる。

一般的には男性より女性の方がはるかに色への関心は強いだろうし、知識も確かと思つが、無関心もはなはだしい私なんぞは、自分の好きな色としてあや

- 1 -

ふやなものだ。

しかし、仕事から塗料については少しながら知識がある。と格好いいことを言いたいところだが、昔この塗装色で失敗したにがい経験があり、いまだに頭から離れないでいる。

製品の塗装には、どんな性能の塗料を塗るか、色は何色がよいか、つやはどうするか、塗料の膜厚は何ミクロンにするか、などの要素で決めてゆくが、中でも色については、通常「マンセル記号」と呼ばれる英数字の番号で扱われ、指小される。

この記号は、色の感じを表わした「色調」、色の明るさを示す「明度」、それに鮮やかさをあらわす「彩度」の組み合わせで示されるものだが、これが結構似かよつた記号になるため、まぎらわしく混乱するときがある。

失敗した例は、発電所の中央制御室で使われる、配電盤と呼ばれる学校の教室に入るくらいの大きな電気製品の設計をやっていた頃、その表面塗装色をやってしまった。

- 2 -

7・5B G 4 / 1・5 というマンセル記号の地色に、7・5B G 6 / 1・5 というツートンカラーの部分を組み合わせるものであったが、勘違いをし、設計図のある部分の色指定を逆のマンセル記号で指定してしまった。

記号の中ほどの1文字がテレコになっただけであったが、出来上がってきた製品を見てビックリ。淡い地色に引き立つ模様であるべきものが、どぎつい地色に淡い模様となってしまうたから大変だ。

色の誤りは、製品の完成段階で発覚するため、塗装のやり替えは、完成した製品を作りかえるしかない。

お客の工場立会い試験の日程や、出荷日程も決まっている中でのミスはこたえた。工作の方に大変迷惑をかけたが、なんとか1カ月頑張っ間に合わせてくれた。

それ以来、どうも浮世の色「ことも含めて、色と名のつくこと」がらには、あまりかかわりたくない気持ち強いよっである。